
RIA

玖乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R I A

【Nコード】

N 1 4 8 0 K

【作者名】

玖乃

【あらすじ】

人に捨てられ神に拾われた人の子リア。

本質を見抜く目を持つ男アーベル。

ある日の罪を償うために人の住む世界へ舞い戻ったリアとアーベルが出会い、二人は互いに惹かれあう。

ただ誰かを思う気持ちがうむ、小さな物語。

第一話

フイーネ

人は穢れた生き物としか思っていなかった。

欲深く残酷で群れなければ己の場所も守れない弱い生き物。
その日見つけたそれも、ひどく小さな弱き人の子であった。

白雪にそつと置かれた籠の中。

まだ人の臭いがただようそこに残っていたのは、天の匂いを持ち
余す幼き赤子であった。

「おぬし、捨てられたか。」

ただ気まぐれに声をかけた。

かわいそうにここで死ぬのかと憐れみその顔を見ると、赤子は高い
声をあげて笑った。

金の細く綺麗な髪の毛に、白い肌、その容姿は神の愛娘と呼びたく
なるほど美しかった。

しかし一目で捨てられた理由が分かった。

「・・・人は愚かな生き物よ。瞳が恐ろしくなって捨てるのだから。」

我を見るその瞳は青い空色をしていた。

それは人の世で化け物としておそれられた瞳の色。

「どちらが化け物か。」

神である我が言えたことではないが、とおもむろにその赤子に手を伸ばす。

人が死のうが生きようが、我ら神にはなんの関係もない。

人は神をあがめるが、神などそこらの妖怪が力を得たのとかわりない。

けれど人と同じで感情というものがあるだけ厄介だということを何千年と生きて知った。

今その赤子を抱く己の感情も、面倒でしかたない。

「哀れよの、人の子。人になり、人に殺される。・・・なればいつそ、我が空へおくつてやろうか？」

せめてもの慰めに。

空から降りたその子を、楽に空へとかえしてやろう。

そう言葉もわからぬその子に我は無意味にも問いかけた。

「・・・」

腕の中で赤子はただ我を見つめていた。

「鳴かぬ赤子だな。鳴かぬと誰もお前のことなど気づかぬぞ？」

「・・・」

気まぐれにその白い頬にそつと触れる。

その時、小さなその手が我のそれを握った。

「・・・鳴かぬのは、我が赤子の泣き声を嫌いと知ってか？」

弱い、けれどその手は私の指一本に懸命にしがみつくように握りしめる。

「おもしろい。空へかえすのもつまらぬな、お前には私の使者として名を与えてやろう。」

それがすべての始まりだった。

全ては私の気まぐれによって運命が変わった。

第一話（後書き）

感想や指摘、気付いた点がありましたらお知らせください。
よろしく願います。

第二話

＊フィーネ＊

「フィーネ様、何故人の子など拾っていらしたのですか。」

天城へと帰るなり付き従えるライキが嫌な顔をして、腕の中を睨みつけた。

「ライキは人が好かぬの。面倒は我が見よう。」

「そういうことではございません。フィーネ様は人に情を移されたのですか？」

「面白いから、拾うてみただけのこと。」

他に何の意味もない。

人の子に情を移すはずがないだろう？と我はライキの目をみた。

「いいではないか、こやつが死ぬのもあつという間だろう。」

ライキは力を持たぬ神のはしくれ。そのせいで人に幾度も傷つけられてきた。

ぼろぼろになったところをたまたま我が面白半分拾ってきたのだ。それから傷が癒えてもなお、好んで我の世話をしまわっている。

「そう……ですね。どうせ人などすぐに死ぬ。」

急にライキの言葉が冷たく落とされる。

いつもは穏やかで無心のライキの眼は人のこととなるとどうにも感

情が抑えきれないようだった。

「名はどうしようかの。」

「名をおあたえになるのですか。」

「名がないと、おぬしはこやつをなんと呼ぶのだ。」

青い眼がライキを映すと、ライキはパツと背を向けた。

「呼びません。」

「そうか。なら、リアと名付けようか。」

我ら神からすれば人の一生など、短き間だ。

人と交わることなど何度もあったが、その別れをただの一度も悲しいと思うことはなかった。

それが当たり前なのだから、悲しむ必要などどこにもないのだ。

「リア、ですか。」

「呼んだの？」

我がくすりと笑うとライキが恥ずかしそうに眼をそらした。

平凡だった日々が、ただ朽ちる日を待つ日々が、この赤子によってどうなるか。

そう思うと我は気づかぬうちにほほ笑んでいたのだった。

第三話

フイーネ

鳴きもしない赤子を雪の中から拾い上げた日から、七度目の春が訪れた。

「リア！！！待ちなさい！！」

あれから平凡な日など奪われ、毎日がまるで嵐のように感じられた。

「ライキおそーいつ。」

毎日賑やかな声が城内を響き、言葉が常に飛び交う。

バタバタと走る二つの足音は楽しげに響き、それがいつしか日常となっている。

「こらっ、リア！」

「早くお花を摘みにいこーよ！」

「ちゃんと服を着なければ、風邪をひきますよ、まったく！」

「えー。だってだって、もう春よ？それにライキはあんまり服着てないでしょー？」

今日も駄々をこねながらコートに袖を通すリアにライキがため息をついた。

綺麗な金の髪を二つに結ってもらって嬉しそうにしているリアをライキは優しい目をした。

二人はまるで人の世でいう兄妹のようだった。

「僕は平気なんです。ほら、ちゃんと着て。」

「でもでも、ライキが病気になったら私やだよー。」

がしつと小さな腕がいつぱいいつぱいにライキを抱きしめる。

ライキはあんなに人が嫌いであつたはずなのに、その腕をたまらなく愛おしそつに見つめた。

「ありがとう、リア。けれど平気です。僕が一度でも風邪をひいたことがありますか？」

「んー、ない。」

「でしょう？さあ、できた。フィーネ様にあいさつしてきなさい。」

「はい。」

はじめはあんなに嫌がっていたリアの世話も、今ではライキが自ら進んで行っている。

小さな子供にどんな力があるのか、人嫌いだったライキが人里へ下りれるまでになっているのだ。

そう思うと楽しそつに鼻歌を歌いながら階段を上る少女が特別な何かに思えた。

「リア、我はこちらだ。」

「あつ、フィーネ様！」

「でかけるのかい？」

「はいつ。ライキとお花を摘みに行つてきます。」

まだ少し冷たい風が吹くこの日のことを、ライキは忙しいあまり忘れていたのだらう。

我はリアの手を引いて入口に立つライキのもとへと向かった。

「ライキ。」

「フィーネ様？どうなされたのですか、その身支度は。」

「ふふ、忙しすぎて忘れていたのか？今日はコヨミの会がある日であろつ？」

十年に一度開かれるコヨミの会とは、時の神を継いだコヨミが催す神の集う会だ。

今回はライキにも招待状が来ていることを言い忘れていた。

「あつ、申し訳ございません！申しただければ準備のお手伝いくらいはできたのですが。」

ライキはそういつて頭を下げる。

「かまわないよ。それより今回はライキにも来てほしいってさ、初回は席を外すわけにはいかないだろう？」

「本当でございますか！？ぜひ、お供させてください。」

「わかった。けれど困ったことが一つあるんだよ。」

「ああ・・リアですか？」

「リアもだけど、今回は本当に日が悪い。今日は雪ふらしの日よりとかぶってしまったの。」

「ああ、そういえば！！」

ライキは毎年行つ雪ふらしの日まで忘れていたらしい。

今日雪をふらすのは、神である唯一の仕事であった。

いつもはライキに任せているが、今年はコヨミの会にライキが出席しなければならぬ。

たった一つの仕事もなせない神など、次の神諮りによって神からおろされかねない。

「困ったことよの。」

そうこぼした瞬間、それまで静かに手をひかれていたリアが私の腕を強く引いた。

「ねえっ、フィーネ様？私が雪ふらししましょうか??」

目がきらきらと輝いている。

たった七つの人の子に、この地に雪を降らせられるだけの力があるとは思えない。

我はくすりと笑ってリアを抱き上げる。

「お前は優しい子よの。」

「ライキとフィーネ様のお役に立ちたいの!」

「そうかの?」

力をためた石をもたせれば雪ふらしくらいはできるであろう。

我は手を握り力をそこへ集中させた。

「わあ、綺麗な石!」

手を広げその手の中の碧色をした石にリアは感嘆の声をあげる。

それを腕の中の少女の小さな手にのせると、リアは嬉しそうな顔で石を握りしめた。

「いいかい、リア。これから言う言葉を覚えておくれ。」

「はい、フィーネ様。」

「『白きつがいの扉よ開かれん。地を白く覆い冬の終わりとなるように。』」

「シロキツガイノトビヲヨヒラカレン。チヲオオウフユノオワリトナルヨウニ？」

一度で覚えてしまえるとは、頭のいい子だと頭をなでる。

ライキはリアを温かい目で包み込み、にこりとほほ笑んだ。

「ライキ、おぬしは行きながら準備をするのだぞ。」

「あ、はい。」

「では行くの。リアは時計の針が零時をさしたら外へ出てさっきの言葉をいうのだぞ。」

「はい。」

この子が死ぬまでここはこんなにも温かくあるものだと思っていた。年老いて、体が動かなくなってもまだ、こんなふうに笑ってみせるのだと思っていた。

人の運命とは面白いほど簡単に動かしてしまうものだと、そうその時から思わずにはいられなくなった。

第四話

ライキ

十年、神にとってはほんの短い時間。

けれどリアに触れていたこの十年をきつとフィーネ様もずっと短く感じていただろう、僕と同じように。

「ライキ。」

「何です、リア。」

月の明かりが青い世界を作り出し、庭の白薔薇を染め上げる。

冬を越えたばかりのまだ冷たい風が長く伸びたリアの綺麗な髪の毛を揺らした。

あれから十年しかたっていないというのに、リアはもうすっかり女の子になっていた。

僕はその成長の早さに驚き、そして悲しみを覚えずにはいられなかった。

「私ね。」

あの日、コヨミの会から帰るとリアは悲しみに埋もれていた。

何日たってもその目はうつろで、花摘みに連れて行ってもにこりとしなかった。

毎日鬱陶しいほどに笑顔を振りまいていたリアから笑顔が消えてしまったことは

フィーネ様にとっても僕にとっても一番失いたくなかったものを失

ってしまった感覚を抱かせた。

フィーネ様はその日起こったことを調べ、僕に教えて下さった。

「もう、下りようと思うの。」

それは幼い少女にはあまりにも重たい出来事だったのかもしれない。僕はその出来事を聞いてリアのもとへと駆けて抱きしめた。

人が死ぬことなど当たり前のことなのだ、何もお前のせいじゃないと、そういいながら。

「まだ、背負っていたのですか。」

二人並んで庭の薔薇を静かに見つめる。

少しずつ笑うようになり、今ではもう昔と変りないほど元気になった。

けれど時折見せる横顔はやはり、罪を背負う者の顔だった。

僕らがコヨミの会にでかけ、時計の針が零時をさし、少女は小さな石を握りしめて雪を降らせた。

天城から見えたのはきつと美しく染まる白い街だったろう。

ただ、人の子が泣いた。雪により馬車が転倒し、両親をなくした少年がその日涙を流した。

リアはそれを知ってしまったのだ。

「私が捨てたら、誰が償うの？」

ふわりと笑って風に揺れる髪を耳にかけた。

その仕草はもうすっかりフィーネのように美しい女性へと向かっていた。

「それはそもそも償うべきものではないはずですよ。何度も言いま

した。人は死ぬものだ、と。」

「人は死ぬもの、けれど私は奪ってしまった。」

「はぁ・・・、本当にいつた誰がこんな頑なな子に育ててしまったのでしょうか。」

「ライキね、私、ライキっ子だもの。」

くすくすと笑い声が二つ響く。いつまでもこうあることはできなかったのかと心の中で悔いをこぼす。

人と交わりを持つことがどういうことかなど痛いほどわかっていたはずだ。

それが別の痛みへと変わることなど知らなかった。

「誰が雪を降らせていても、彼らが死ぬことに変わりはありません。運命なんですよ？」

「・・・そう、だからこれも運命なの。彼に謝るために私は人里へ下る、それも運命。」

「もう、決めてしまったのですか。」

はじめは厄介でしかたなかったのを、つい昨日のことのように思い出す。

フィーネ様が連れてきた赤子から感じ取る人の臭いに、僕はいら立ちを隠せなかった。

鳴くことをしない赤子に不思議を抱き、ほほ笑みばかりをむける赤子に悲しみを抱いた。

ふいに触れてみるとそれはやわらかく、穏やかで、温かった。

「うん。」

リアが一番に覚えた言葉は僕の名だった。

イの抜けたなんと間抜けな発音に、僕は思わず涙を少し零して笑

った。

いとおしい、そんな存在になりつつあることをその時感じた。

「こんなに大きくなって。」

それまでずっと人は自分を傷つけることしかない存在でしかなかった僕にとって、リアは光だった。

自分を必要とし、受け入れ、認め、大切に扱ってくれる人間。

そんなリアが離れる時を、いつしか何よりも怖く感じ始めていた。

「やはり人は・・・僕を傷つける生き物だ。」

「ごめん、ライキ。」

シユン、と顔を俯かせながらリアはそういった。

「内側を傷つけられたのは、リアが初めてです。」

「ごめん・・・。」

内側、それはいい意味だった。

体は何度も傷つけられたが、心だけはただの一度だって傷つけられることはなかった。

そんな僕に別れという痛みを与える、唯一の存在。

「離れることなど辛いはずがないと思っていました。けれどこんなにも苦しい。」

これならまだ、体を傷つけられるほうがずっとましかもしれませんね。」

「ライキ・・・。」

「まあ、僕にはフィーネ様がいらっしゃいます。だから平気ですよ。」

リア、そう名前を呼びそうになって口を閉じた。

「ありがとう、ライキ。何も最期じゃないよ、ちゃんと遊びに来るから。」

リアは穏やかにほほ笑んだ。

初めて僕がそのほほをそつと触れた時、ほほ笑みかけたのと同じように。

「人は嫌いです、リア。」

ふわりと立ち上がったリアは月に背を向けて、座っている僕を抱きしめる。

「私はライキが大好きよ。」

その細い腕が僕を抱きしめるのに、もうあの日のようにいっぱいっぱいではなくなった。

「知っています。」

時は奪われていく。そう感じたのはリアと出会ってからだった。

いつだってリアのそばで、リアを大切に見守ってきた。

いつまでもこの笑顔が自分に向けられるように、フィーネと三人で穏やかに過ごせるように。

少女が成長していくたびに、奪われていくときにおそれるようになった。

けれど少女は死を迎えるよりずっと早く、ここをさる。

「リア。」

愛おしい人の子、どうか僕を忘れないで。
そついで呟きながらそつとその背に腕をまわし抱きしめ返したのだ
った。

第五話

リア

さようならは言わないと決めていたはずだったのに。

「リア、本当に行くよの。」

「はい。」

「ライキは？」

「ちゃんと昨日お別れできました。」

「そう。」

優しい温度に包まれた日のことを私はぼんやりと覚えていた。

冷たい雪を見ると嬉しさでいっぱいになるのは、フィーネ様が雪の中から拾い上げてくれたのをほのかに思い出すから。

私は冬が一番好きだった。

ライキに昔聞いたことがあった。冬に捨てられたのに冬が好きなのかと。

捨てられた、という言葉に少し悲しみを感じはしたが、その感情を覆い抱きしめるように優しい温度を思い出す。

「私は冬に捨てられたけど、冬が一番好きです。フィーネ様が拾って下さったときの温度が大好きです。」

「そう。」

さよならは言わない、何度も心の中でその言葉を繰り返す。

「おいで、リア。」

名を与えてくれたフィーネ様は私にとって母親だ。

いつだって遠くにいながら、ずっと見守っていてくれたその目が大好きだった。

そしてまた抱きしめられた。あの日と同じ温度がそつと私を包み込む。

「気まぐれで拾っただけぞ？本当はお前を空へかえそうとも思っただのだ。」

「いつまでも優しいフィーネ様。」

「・・・お前は我が泣く子が嫌いだと知っていて、泣かぬのか。」

「フィーネ様大好き。」

「ああ、あの時もリアはそう言いながら手を握ったの。」

きつとそうだ、私は目を閉じた。

本当は赤ちゃんの時のことなんて何も覚えていない。

ほんのり感じる懐かしい温度や感覚くらいしか知らない。

けれど思う、私はきつと優しく私に触れたフィーネ様に大好きと告げていたのだろうと。

「はい。ずっとフィーネ様が大好きです。」

「あまり神を好いてはならぬ。我らは獣が少し力を持ったのと変わらない恐ろしい生き物よ。」

気まぐれで赤子を拾い、気まぐれで育てる。そこに情はない。今まで何度もそう言い聞かされてきた。

「けれど私はフィーネ様が大好きです。命を拾った貴女が恐ろしい生き物なら、命を捨てた人はただの化け物ですよ。」

「ふふ、そうかの。」

フィーネ様は誤魔化すように笑いをこぼす。

けれど私はときどき訪れる訪問客が話しているのを何度も聞いた。人の子など汚らわしく、そんな人の子を育てていると噂がたったフィーネ様は神谕りでひどくお叱りを受けたと。

さつさと捨ててしまえば、華やかな暮らしを奪われずに済んだのに、それでもなお人の子を育て続ける愚か者と謳われていること。

「いつまでも優しいフィーネ様。」

「綺麗な人の子、いつでも戻っておいで。」

「はい。」

さよならは言わない、その言葉が心をしめつける。

ここをほんの少しの間離れるだけ、そう、それだけ。

彼に謝罪をして、罪を償って、全てが終えたら帰ってくる。そう思いながらフィーネの腕の中で涙をこぼしたのだった。

第六話

リア

雪ふらしのその日、私は人の住む場所へ足を下ろした。

「ああ・・・フィーネ様の匂い。」

今年の雪ふらしはフィーネ様が直々に降らせ、その雪は私へのはなむけとして世界を優しく包んだ。

きらきらと光る白雪は、私の手に触れるとすぐに溶けてしまった。

「いつまでも残っていればいいのに。」

それも無茶な願いね、と小さく零した笑いが静かな空気を揺らす。

私はどこにいるかもわからない、あの日の少年を捜しにきた。

大きな屋敷に住んでいることだけを頼り歩き続けることしかできなかった。

天から見えていればよかったと少し後悔しながらも、楽をしてはいけないと足を動かし続ける。

『あら、フィーネ様のところの人間の子?』

音の少ないその場所に響いた高い声は響かせ細い枝にとまる黄色い鳥のものだった。

私はその綺麗な声に顔をあげて小鳥を見た。

『やっぱり。どうしてこんなところに一人でいるの?』

「あつ、あの・・・。」

『どうしたの?』

「私、大きなお屋敷を捜しているんです。」

私の言葉に鳥は小さな頭を傾け周りを見ながら答えた。

不安な気持ちが募り始めていた私は、親しげなその言葉に安堵を感じた。

『大きな屋敷?なんでまた。』

「・・・会いたい人がいるんです。」

会わなければならない人が、そう思うと小鳥がふわりと白い雪の上へ舞い降りた。

『その人、年は?』

「えっと・・・わかりません。何も知らなくて。ただ、人だから・・・もう二十歳くらいかと。」

『若いわね。他に覚えていることは?』

「・・・両親が事故でなくなって、たぶん一人です。」

『何年くらい前?』

「ちょうど十年前です。」

鳥は目を閉じて羽をときどきゆすりながら考えているようだった。黄色い色が白い地面の中でまるで花が咲いているように色を付けている。

『クレイズのお屋敷かしら。』

「クレイズ・・・?」

『今はアーベルという若い当主が継いでいるはずよ。きっとそこね。』

『「本当に!？」」

『ええ、きっと。案内しましょうか?』

黒い瞳が優しく私をのぞく。

「優しい小鳥さんっ、ありがとう。」

『フィーネにはいつもよくしてもらってたもの、青い目の子。役に立ててうれしいわ。』

「私はリア。」

黄色い小鳥はふわりと空へ舞い上がるとゆっくりと空を渡って行った。

『リア、こっちよ。』

「あっ、待って。」

人の匂いが強くなっていくのを感じ、私の足はどんどん重たくなっていく。

会いたい、けれど会いたくない。

私の心の中の時はあの日で止まったままなのかもしれない。

白い雪は踏むたびに音が鳴り、まるで楽しい音楽のようにも思う。

「ありがとう、フィーネ様。」

償うことなどできないほどの大罪を、私はこれから償いに行く。どうか全てが終わるまで、待っていてください。空をまう粉雪に黄色い鳥が舞う。その景色を見ながらただ足を進めていくのであった。

第七話

＊リア＊

案内された大きな屋敷は十年前に見たのとまったく同じものだった。赤黒い煉瓦の塀が分厚くあり、その奥には大きな屋敷がのぞいている。

小鳥にお礼をいって、とりあえず大きな格子の門の前でため息をついた。

「・・・。」

罪を償いに来ました、なんていうわけにもいかないし、私は静かに座りこむ。

座りこんでいると冷たい風が体を包み、凍えてしまいそうなのでゆつくりと塀を伝って歩くことにした。

白い雪に覆われる赤黒い塀は長く長く続いている。

そしてその塀をほぼ半分歩いたところで、低い声はその塀の内から聞こえてきた。

「今日は父と母の命日だぞ、会になど出られるはずないだろう。」
「ですが・・・。」

その声と懐かしい匂いに私は無意識のうちに塀の上へと登っていた。その姿を目に映そうと必死で門の上から声の出場所を探す。すると白一面の庭にポツリと黒い人がいるのを見つけた。

「あ・・・」

その姿に声が漏れた。十年という時をえた、あの日の少年。私にはすぐに分かった。変わってしまった声から感じる少年だった彼の空気。

「もういい、さがれ。」

「失礼しました。」

冷たい雪が服をしまて肌に触れるその感覚に体を動かした瞬間、目の前の視界がガラリと変わった。

「わっ。」

前のめりになり不安定となった体が宙をまう。そこにあつた木々の枝に引っかかり痛みを負いながら、背中に優しい衝撃をつけたのを最後に体は落ちついた。

「っ・・・たい・・・」

「平気か!？」

フィーネ様とは違う腕の温度にリアはそつと目を開ける。

大きく力強くしつかりと包み込むその腕が誰のものを判断するまで時間がかかった。

いつの間にか空へ仰向けの体制となり、体中に痛みが走っている。そしてさきほどまで上から見つめていたその姿が、今すぐそばで私を抱えている。

「ごめんなさっ・・・い・・・った・・・!!!!!!」

体を起こそうとした瞬間右腕に鋭い痛みが走る。

「君・・・落ちる途中に怪我をしたんだね。中に入って手当てをしよう。」

私を抱いていた彼は雪の上に私をそつと座らせると、黒いマントを脱いで私にそれをかぶせた。

甘い匂いに体の力が抜けた。

そんな私の体をもう一度抱き上げようとする腕に気付き、痛みを我慢して体を動かした。

私はこの人に優しくされる資格なんかない。

十年前の慌ただしい声たちと、悲しみを零す目、全てがよみがえる。

「ごめんなさいっ・・・ごめん・・・なさい。」

腕の痛みよりずっと胸を締め付ける、その大きな姿に涙がこぼれる。私の涙が浅く積もる雪に落ちると、雪がさつと溶けていく。

何粒も何粒もとめどなく溢れてくる涙に彼はえ？と小さく声を落とした。

「ごめ・・・っ・・・なさいっ・・・私・・・わた・・・し・・・」

何への謝罪か理由を述べることもできず、ただ謝り続けることしかできなかった。

雪が肌にふれるたび、静かに溶けていくその感覚にさえ辛くなる。俯いて目を閉じている私の頬に大きく優しい温度が触れた。

「せつかくの綺麗な目がだいなしだ、もう泣かなくていいから。許すから、ね？」

低い声が言葉を紡いで私を優しく抱きしめる。
それはあの日と何も変わらない優しさだった。

「許さないでっ・・・許しちゃ・・・だめっ・・・なの・・・。」

泣きたいのはあの貴方のほうなのに、私はあの日も泣きながらそう思った。

そう思っても止まない涙に自分がどんどん嫌になっていく。

「ふっ、変な子だな。」

彼は笑った。

「・・・ふえ・・・？」

「ははっ、さあ、風邪を引くよ、おいで。」

なんで笑ってるの？

その驚きに涙が止まったのを気付かなかった。

私よりもずっと辛く重い気持ちを背負っているのだと思っていた少年は今日の前で笑っているのだ。

広げられた両腕を驚いた目でじっと見てみると、待ちかねたのか彼は私を引きよせ腕に収めるとそのまま立ち上がった。

「また変な拾いものをしてしまったな。」

困ったように彼はそう言ってデッキから温かな部屋へ入った。

私はその瞬間さえも驚くのにいっぱいはいっぱいで、ただ静かに彼の腕の中におさまっているだけだった。

第八話

＊リア＊

軽々と抱えられたまま部屋に入り黒く柔らかなソファに私を下ろすと、彼は少し大きく凜々しい声で誰かの名を呼んだ。その声にたった一つの足音が近づいてくる。

「お呼びですか、アーベル様。」

可愛らしい声は小さな少女から響いた。

目は黒で赤みがかった髪はくるくると巻いている。

「ああ、この子の着替えを手伝ってくれ。」

「そちらは・・・アーベル様・・・その子。」

私を見た目が一瞬恐れを映した。

それはその子が人ではないからかもしれない、私は静かに目を伏せた。

獣の匂いをまとう人の姿をした者、彼はそれを知らないかもしれない。

「着替えだけここに運んでくれ。」

「あ、はい・・・かしこまりました。」

彼は何も知らない、あの日も今も、何も知らずに優しくしてくれる。静かに扉を閉めて離れていく足音が消えた時、私の隣に彼が腰をか

けた。

広い部屋は煉瓦できていて、暖炉ではバチバチと音をたてて火が燃えている。

けれどその重たい部屋には似合わないほど、優しい空気が私を包む。

「俺の名前はアーベル。君の名を聞いてもいいかい？」

先ほどとは違った優しい言葉遣い。あの日と同じで、私に向けられる言葉。

「・・・貴方に名前を呼んでもらえる・・・資格は・・・ない。」

貴方は何も知らない、もしも私が貴方を不幸に追いやるものだを知ったら、もう笑いかけてはくれない。
心がぎゅゅと締め付けられた。

「ならば俺が与えた名を呼ぶよ？」

「与えて・・・もらえるだけの・・・価値はないの。」

「資格や価値で呼ぶわけじゃない。呼びたいから呼ぶだけだよ。」

大きな手がまた頬を触れた。

貴方を不幸にすることしかできない私に貴方は笑いかけてくれるの？
そう思っても口は言葉にしてくれない。

「泣き虫だね、君は。」

零れるものは音もなくほほを伝い、優しい彼の温度にとかされた雪のようだった。

私の体にあるフィーネ様の雪が溶けだして止まらない。

「綺麗な瞳がだいなしだ。」

「っ・・・」

「名前を覚えてくれないかい？」

私はここに罪を償いにきた。

「・・・リ・・・ア・・・」

あの日奪った命の償い。

「ああ、思った通り。素敵な名だね。」

フィーネ様が与えてくれた名を、素敵だと言ってくれるこの人に私は何ができるだろう。

傷つけることしかできない、不幸しか与えられないそう知っていて
も貴方はきっと私に笑いかけてくれるのでしょうか？

第九話

アーベル

少女は泣いた、泣いて、泣いて、そして眠った。

泣きながら服を着替えて、泣きながら手当てをつけて、泣きながらスープを飲んで、そしてふと気付くとソファで眠っていた。

彼女が流す涙は全て綺麗だった。

俺の目に映る、人であり人と交わらぬ空気を持つ少女。

「アーベル様。」

少女にマントを被せようとする俺に近づく足音の主が俺を呼んだ。
その声に振り返るとミチが紺色の布を抱えて立っていた。

「ああ、すまない。」

「いえ。」

布を俺に渡す手が少し震えているように感じた。

ミチは人ではない、そのため何かを感じるのかもしれない。

俺は小さなミチの頭に手をのせてなでてやる。

「怖いか。」

ミチはもとは小鳥の子だった。人に傷つけられ獣となった幼き小鳥の子。

だからあまり人を好きではないことは知っていたが、それでもこん

なふうにおびえたことは一度もなかった。

「・・・その子は人ではありません。」

「そうか。」

「人でありながら・・・人ではないものです。」

どこかそんな気はしていた。

俺は何故だか人には好かれないが、人ならざる者には好まれる性格らしい。

ミチもそうだがこの屋敷で働くものの中には獣が幾人かいる。その誰もがここにすることを望んだ。

「ああ。」

人に傷つけられ、人を傷つける力を持たぬもの。

俺はそんな者たちを見るとどうしても、拾わずにはいらなかった。

「どうかお願いします。・・・どうか、あの子をお拾いにならないでください。」

「おもしろいことをいう。」

「冗談ではありません。」

ミチは震えながら足元を見てそう言った。

俺はその姿から目をそらし、すやすやと眠る小さな少女の金の髪に手を通す。

この子はひどく優しい生き物としか思えなかった。俺には人の本質というものが見える。

父と母を亡くした時から、人の心や本心、そういったものが雰囲気から感じ取れてしまう。だからわかるのだ。

リアはひどく優しくもろく、ただの人とは違う力を持つがために傷つけることができ、それゆえに心を痛める。

「ミチにも見せてやれたら、お前はきつとそうは言わない、いや、言えないよ。」

拾ってやりたい、そう思うのはいつも生きる場所を与えたいという気持ちからだった。

ただリアは少し違う気がした。

「この子はきつとここにすることを望まない。目を覚ませばまた涙を流して謝る。」

ここにいられる価値はない資格はないと言いながら、優しくしないでという目をして。」

必要としてくれるものに手を伸ばさずにはいられない。だからいつも拾いものをしてしまう。

けれど彼女は必要とはしないだろう。その手を拒むのだろう。ならばなぜ、俺はこんなにも惹きつけられるのか。

「・・・シイが許しません。きつとシイはその子を傷つける。貴方を守るためなら簡単に。」

「ああ、あいつも優しい生き物だからな。けれどあいつが俺を守るなら、俺はリアを守るよ。」

雪の中舞い降りた、この子は優しい。

怪我を直そうといった瞬間に、彼女は立ち上がり、裸足のまま白雪を歩いて塀にそうようにして生えている木に近づいた。

その背に靴を履くようにと声をかけても、彼女は振り返りもせずその木々を見上げた。

少女は見上げながら、泣いていた。
血がでている右腕をそつと木に伸ばし、左腕とともにその木に回し抱きしめた。

『ありがとう、助けてくれて。』

傷を与えたのは木の枝なのに、少女はお礼を言った。

『ごめんね、ごめん・・・傷つけてしまつて。フィーネ様、どうか・
彼らを癒して。』

無力さから出る涙がそこに交じっていた。
そこにある木々は風に揺れ、音を立てる。

少女が落ちてくるとき、木々はばさばさと枝を重ね、少女を助けようとしたのか。

そう、感じただけなのか。

「庭師を呼んでくれ、あの木の折れてしまった枝を切つてやらないと。」

「・・・はい。」

ミチは困つたように笑った。

大切にしてくれる者がいるのはなんであれありがたい。
けれどリアはこの地に大切にしてくれるものをもっていない気がした。

なら俺が大切にしたい、今はただそう思いながら少女の頭をなでているだけだった。

第十話

リア

夢を見た。

大きな木が揺れてた。その木の根元にフィーネ様が座って本を読んでいる。

私が立っているのに気付くと本を閉じて、細く綺麗な手で私を呼び寄せる。

「落ち着きがないのは変わらないよの。」

ふわりと笑うその笑顔が懐かしく、心細かった気持ちが一気に消える。

そんな私を優しく抱きしめるフィーネ様はそつとその木を見上げた。

「リアを救ってくれたのだな、あの枝はもう治せぬ。」

「・・・ごめんなさいっ。」

「この木も怒っているわけではないのだぞ。」

「そ・・・ですね・・・、ありがとう、ありがとう。」

木は風もないその場所で揺れる。

「立派だったのに、枝が。」

枯れてしまっている。優しく傷つける力を持たないものは、いつも傷ついてばかり。

「リアにも謝っておるぞ？怪我をさせてすまない、と。」
「あ・・うつん、ありがとう、ほんとうに。」

真つ白な場所でただ穏やかな時間が流れる。

温かな温度が体を包み、そこにいるだけで安らげる。

「きつとあやつも謝ってほしいなどと思っではおらぬぞ。」

フィーネ様がいうあやつとは、アーベルのことだろう。

「それでもやつぱり、謝らなければなりません。」

「そうかの。・・いつか気付くといいの、彼がもつ優しいものに。」
「??」

終わりは簡単に訪れた。

さよならも言わずに夢はシャボン玉がはじけるように消えてしまった。

はつとその感覚に目を開くとそこには私をじっと見つめる銀色の優しい目があった。

「ア・・ベル」

「ああ、起きたね。何か、悲しい夢でも見ていたのかい？」

私が始まるまでずっとそこにいてくれたのか、彼は頭をなでていた手を頬に下ろしていった。

涙、と彼は小さくいつて笑う。

私は夢を見ている間に泣いていたのだろう、彼は困ったように笑った。

「悲しいじゃなく、幸せな夢です。」

「そう?」

「はい。・・・あの、木。枝はもう治らないそうです。」

私はこの世界の優しいものを傷つけることしかできないのかもしれない。

私の存在自体がこの世界から拒まれている。

「ああ、庭師もそういつていたよ。」

すっかり薄暗くなった庭を遠くに見るように彼は言った。

紺色に染まった世界のなかで、うつすらと木の枝が揺れているのが見える。

「庭師さんを・・・よんで下さったのですか?」

「ん? ああ、君がひどく気にしているようだったから見てもらったほうがいいと思って。」

「・・・よかった。ありがとう。」

安心してほつと笑顔を零した。

彼はきつとその笑顔に驚いたのだろう、目を少し大きくした。

「もしよければ、ここに住まないかい。」

行くあてがないことを彼は知っているのか、もう私を引きとめる気しかないように感じた。

けれど彼は険しそうな表情をしている。

きっと私がそれを断ることを知っているのだ。そう、私はここにいられない。

彼の傍にいられない。そう全てを話して、罪を償わなければならな

い。

「俺と一緒にいたいんだ、俺のために、ここにいてくれないか。」

ほほを触れていた手が離れたと思えば、今度は私の冷たい手を握っている。

何故この人はこんなにも温かいのだろう、私は心が苦しくて仕方なかった。

そこには矛盾が生じてしまう。

彼のためにここにいると、彼を傷つける。

彼を傷つけてしまうとわかっていても、彼の傍にいたい。

彼を傷つけたくはないのに、それでもなお彼に少しでも触れていてほしい。

「お願いだ。」

この屋敷にいくつも感じる獣のにおい。アーベルはいつもこんなふうに彼らをここへ置いたのか。

「・・・よろしく、お願いします。」

いつか、いつか告げなければならぬときまで。

それが彼の願いだというのなら、そこにどんな矛盾が生じていても私は彼の望むようにあろう、そう決めた。

第十一話

リア

アーベルは私に二階のテラスのある広い部屋とたくさんの洋服を与えてくれた。

必要ないと言つても、どれを見ても君に着せたくてと笑うばかりで私が困った顔をして無駄だった。

私はこの部屋でただアーベルが帰ってくるのを待つだけの時間を過ごしていた。

この屋敷の中ならどこを出歩いててもかまわないと言ってくれたが、人ならざる者の存在が私を拒んでいることは何となく気付いていた。だから私はこの部屋の中でずっと一人ぼっちで過ごしていた。コンコン、と明るいノックが部屋に転がる。

私は横たえていた体を起してベッドの上から返事をした。

「はい。」

まだ昼食を終えたばかりで、一日の中で一番長く暇な時間に珍しく誰かが私を訪れてきたようだった。

私の声に失礼しますと礼儀正しそうな声が響くと、扉の向こうから真っ黒のコートを着た男が部屋へ足を踏み入れ、頭を下げた。

「・・・貴方・・・」

怖い、その感覚が私を襲う。

この男は人じゃない。その感覚を説明することは難しいが、体が拒否反応を示す。

「まさか、本当に魔女をお拾いになられたとは。」

冷たい声が私の体をベッドに縫いつけた。

「よくもまあ、魔女の分際でアーベル様に近づけたものですね。」

「・・・私・・・。」

魔女、彼は私を見てそういった。

「ご存じありませんか？人の分際で神になりあがった者を魔女というのですよ。」

時が満ちるまでにこの地で生きる者が天に昇ることは、神になりあがろうとする穢れた人間のすること。そんなことをしてまで、何が欲しかったのです？

この土地ですか？それとも人の命ですか？魔女の欲しいものは何です？」

攻め立てる彼から逃れる場所はなかった。

「青い瞳は化け物だとこの地の人間がいうこともまんざらでもないですね。」

何も言えない恐怖が体を伝って私を殺そうとする。

私は何も知らない。眼が青いだけでこの地では化け物となるのだろうか、彼は私を蔑むように言う。

「・・・私・・・。」

「アーベル様が帰ってきたら、貴方は空へ帰ったと伝えておきます。還った、と。」

逃げなきゃ、体が無意識のうちに開かれたままになっていた窓の向こうのテラスへ飛び込んでいた。

テラスの下はすっかり雪の解けた土が待っている。けれど私の後ろからはあの恐怖が迫っていた。

何も考えている時間なんてなかった。気付けば強い衝撃を受けながら地面に横たわっていた。

アーベルが与えてくれた薄いブルーのドレスが泥で汚れる。

「ちつ。」

上から私を見下ろす目が私を逃がそうとはしなかった。

立ち上がると左足に強い痛みを感じる。もう柔らかな雪も温かな手も私を包んでくれるものは何もなかった。アーベルを愛する者は私が彼の傍にいないことを許さない。

けれど私はフィーネ様に帰ってくると約束し、ライキに遊びに来ると言ったのだ。

それがまさか魂だけが空に戻る事になったら、二人はどんな顔をするだろう。

「はっ・・・はっ・・・」

ぬかるんだ地面をけつて、裸足で走る。

どんどんアーベルの屋敷から離れていく。森の奥へと続く道をただ夢中になって走ることしかできない。この後どうしようとか、アーベルに告げなければならぬことをまだ告げていないのとか、私は償うべきものを償いに来ただけなのに、これが償う道なのだろうかとか、踏み出す一步に恐怖が襲う。

気付けば辺りは薄暗く、緑が生い茂っていた。

「はっ・・・はあ・・・はあ・・・」

荒い息がなかなか整わず、空気を乱す。そんな私の周りを何かが囲った。

まるで獲物を狙う野獣の眼があちらこちらから私を見ているような感覚に私はそこへ座り込んだ。

もう逃げられない。彼の腕に抱きしめられて、大切にされた罰だろうか。

すぐに告げるべきことを告げなかった罰だろうか。

「も・・・いや・・・」

『悪いな、魔女さんよ。別に俺達は魔女さんが憎いわけじゃねーんだが、ボスがお怒りだ。』

一匹のオオカミのような姿をした獣が私に近づきそう言った。

この臭いはさつき部屋に入ってきた男と同じものだ。きっと彼らのボスというのがあの男なのだ。

魔女、魔女と私を嫌うあの眼が怖い。私は何もしていない、私は何も知らない。

体にしみこむ雪が解けて土に溶けた水。フィーネ様に会いたい。

「リアー!!!」

優しい声に私は閉じていた眼を開く。

「アー・・・ベル？」

そこにあっただのは私のもとへ走るアーベルに飛びかかる獣の姿。

何もない私に彼は息を切らして走ってくる。

「やめ・・・て、やめて。」

アーベルの右腕に噛みつく獣をふるい落とし、彼はまっすぐに私のもとへ向かってくる。

何もできない私を抱きしめるためにかけてくる足音に水が零れた。誰にも傷ついてほしくないのに、私は全てを傷つける力しかない。

「もう・・・・・・・・やめて。」

風が私の体から水と共に溢れだしていく。

気持ちいいほど冷たい大好きなフィーネ様の匂いがする。

地面を伝う冷気と白く辺りを覆う雪に獣たちはその場に倒れていく。

私を包む冷たい空気が私を闇へと誘う。

「リア！」

私を呼ぶ優しいあの声を最後に私は闇へ身を落とした。

第十二話

リア

眼が覚めるとそこは何もなかったかのように静かな私に与えられた部屋だった。

温かく包み込む布団はふかふかで、陽だまりの匂いがしている。

「あ、お・・・起きましたか。」

小さくて可愛らしい声に私は窓側に立つ少女を見た。その瞬間反射的に動いた体が重くまたベッドに戻る。怖い、あの感覚が急に体の中を走っていく。

「あつ・・・ごめんなさい。今・・・他の方々は出かけていて、今は私しかないんです。」

人ではない、あの男と同じ気配を持つ彼女の声が震えていた。よく見ると小さな手が震えている。恐れているのは私ではなく、彼女のほうだった。

「・・・平気、ごめんなさい。私・・・そんなに怖い？」

「あ、の・・・。」

今すぐ逃げ出したい、そんな眼を彼女は隠すように下を向いた。

あの男に感じた恐怖を私は今彼女に与えているのだろうか。

ふんわりとした陽だまりの匂いは布団からではなく、その少女からのように感じた。

「貴女、小鳥の匂いがする。」

「え？」

「とても優しい匂い、可愛い声、貴女は小鳥さん？」

私をこの屋敷に連れてきてくれたあの黄色い鳥も同じ匂いをまといていた。

「・・・はい。」

この地の者は優しいことを私は知っている。

アーベルは私の瞳を綺麗だと言ってくれた、あの小鳥はフィーネ様のところにいたというだけで案内してくれて、突然飛び込んだ私を自らの身をもつて助けてくれる木々がいる。

私はそんなものを傷つけることしかできない。

今だって、アーベルが拾った者だからというだけで私の傍にいてくれるこの子を怯えさせている。

「ごめんね。私・・・どうすれば、貴女を怖がらせずに済むのかな・・・。」

「・・・え？」

「ありがとう、眼を開けた時に誰かにいてくれるのって・・・とても幸せな気持ちだね。」

きつと怖かっただろう。眼を覚ませば自分を傷つけるかもしれないという恐怖を抱えて、それでも私が目覚すそのときも傍にいてくれたのだ。

そんな彼女にどうすれば恐怖を与えずに済むだろうと考えても、何も思いつかない。

また眠ったら安心するだろうか、ここを出ていけば安心するだろう

か。

私にはわからない。

「ごめんね・・・傷つけてばかりで。」

誰に謝ればいいのか分からないくらい、たくさんの人を傷つけた。

「・・・どうして、シイが貴女を傷つけたのに。

どうして貴女は私に・・・笑いかけてくれるんですか？嫌わないんですかっ！？」

辛く悲しそうな声がとぎれとぎれに絞り出された。

シイとはあの男の名前だろう、彼が私を傷つけようとしたのは確かだった。

怖くて怖くてたまらなくて、彼女はそんな彼と同じ臭いをもつ獣だけれど。

「それが、貴女を嫌う理由にはなるわけない。」

彼女はひどく悲しそうな顔をして私を見つめた。そしてその表情に驚く私に腕を伸ばすと抱きしめた。

それがどれほど勇気があることか、けれど彼女はその小さな腕を私にまわして抱きしめている。

温かい陽だまりを羽を広げて舞う小鳥の匂いが私を包む。

「優しい、小鳥さん。こんなに優しい者を嫌えるはずないよ。」

「・・・ごめんなさいっ。」

彼女は泣いているようだった。

傷つけたわけでもないのに懸命に謝って、癒そうとしてくれる小さ

な獣。

「名前、聞いてもいい？お友達に、になりたい。」

そこから始められるなら、そこから始めていきたい。
そしていつか、傷つけるではなく守れるように。

「ミチです、リア様。ミチといいます。」
「可愛い名前だね。」

許されるなら、償いとしてアーベルが大切にする者を守るように。
きっとあの男も同じような気持ちがあったのだと思う。
傷つけることしかできない私から、アーベルを守るために必死だった
ただ、ただそれだけ。

だから彼が悪いわけじゃなくて、アーベルを傷つけることしかできない
私が悪い。

「ごめんね。」

「・・・何がですか・・・？」

ごめん、それしか言えない。

貴女の大切な人を傷つけることしかできなくて。
大切な人を守るために傷つけさせて、ごめんなさい。なんて謝つても
許されない。

「何でもないよ。」

だから今はただ笑いかけていたい。
アーベルが大切にする人を。アーベルを大切にする人を。
私に笑いかけてくれる人を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1480k/>

RIA

2010年10月10日02時04分発行